

多様な子どもたちの主体的・対話的で深い学びを

実現する英語教育実践

— ICTを活用した個別最適な学びと協働的な学びの充実を通して —

つくばみらい市立伊奈中学校 教諭 下 田 麻 結

一 主題設定の理由

令和三年度から新学習指導要領が中学校で全面实施され、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善の推進が掲げられた。茨城県教育委員会の令和四年度学校教育指導方針では、「ICTを日常的に活用し、自らの学習を調整しながら学んでいく個別最適な学びと協働的な学びの往還を通して、主体的・対話的で深い学びの実現をする」と示されている。

本校の学区には四つの小学校があり、幼いころから英会話教室に通ってきた生徒や、中学校で初めて英単語を書く生徒など、実態は多様である。令和三年度入学時の実態調

個別最適な学びとは、一人ひとりの特性や学習進度に応じて、その子どもにとって最適な学習をすることである。協働的な学びとは、子ども同士や教員、地域の方など多様な他者と協働しながら学んでいくことである。一人ひとりのよさや可能性を生かし、他者の異なる考え方が組み合わせ

さり、より深い学びを生み出していくことと捉える。初めに自分の学習進度や興味に合った学習に粘り強く取り組む。その後、他者と協働することで自分と違う見方・考え方に触れる。以上の活動を通して、主体的・対話的で深い学びの実現を図っていく。そして、学習内容を深く理解し、実生活において進んで英語を活用する生徒の姿が、研究主題に到達した生徒の姿とする。

(二) 実態調査

令和三年度に実施した実態調査では、「英語学習が好きである」と答えた生徒が76%であった。英語で自分の考えを伝えようとする意欲は高く、対話的な活動に積極的に取り組む生徒が多い。一方で、英語を使用して書くことが苦手な生徒も多い。令和三年度七月実施の実力テストでは、語彙を書く問題の正答率が、英文を聞くことや読むことの問題と比較して低い傾向があった。また、令和三年度英検IBACSEスコア集計を見ると、学力の幅が大きいこ

とがわかる。

三 実践内容と結果

(一) 個別最適な学び

ア 学習者用デジタル教科書の活用

令和四年度から、学習者用デジタル教科書が導入された。教科書本文や新出語句の音声聞くことができるようになったことで、生徒の学習レベルや理解度に合わせた個別学習が可能となった。音読練習を一斉で指導することなく、時間を指定し各自で取り組みことを勧めた。発音が難しい単語を何度も繰り返し発音する生徒、聞こえた通りに発音を繰り返す生徒、音読練習が完璧な生徒は、単語を隠し暗記をするなど、各自のレベルに合った学習を生徒が選んで進めることができた。また、音読が苦手な生徒が自宅で練習をしている様子が何え、学習に対する意欲が向上したと考えられる。一斉授業だけではなく、ICTを活用した主体的な授業が実現できた。

イ 主体的な課題設定

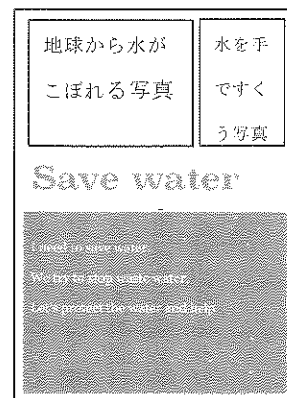
教科書本文を読み取る際に、ワークシートに疑問に思ったことを書く欄を設けている。教科書の内容

査では、自分の名前をアルファベットで書くことに困難を示す生徒や実用英語技能検定二級を取得している生徒があり、学力に大きな差が見られた。このため、一斉指導を中心とした授業だけでは、これらの生徒が主体的・対話的で深い学びを実現することは困難であると考えた。このことから、ICTを効果的に活用し、個別最適な学びと協働的な学びを充実させることで、生徒の主体的・対話的で深い学びを実現できると考え、本主題を設定した。

(二) 主題に迫るために

(一) 基本的な考え方

でもっと知りたいことや興味をもったことを書き、生徒自身で課題を作成している。環境問題について扱う単元では、「井戸がない国があることを知った。そのような国の子どもたちのために、自分にもできることがないか。」と記述した生徒がいた。その生徒はその後、学習用タブレット端末で環境問題について深く調べ、ポスターを作成した(資料1)。自分が理解できなかった点や知りたいこと、興味をもったことを



(資料1) 水を大切に使うという考えを伝えるポスターを作成した様子。一人ひとりが異なる目的をもって教科書本文を読むことができるようになった。

ウ 録画・録音機能の活用

自分の発音を学習用タブレット端末に録音する活動や、プレゼンテーションを練習する動画を撮影する活動を行っている。自分を客観視することで、声

の大きさや視線、発音、イントネーションなどを訂正することができる。また、自分で録音や録画したものを教師に提出し、アドバイスを受ける。録音や録画は何度でも繰り返し直ができる。そのため、より良いものを提出しようという練習を繰り返して、何回も挑戦する姿が見られた。このことから、生徒は意欲的に学習に取り組むことができたと考えた。

工 振り返りの充実

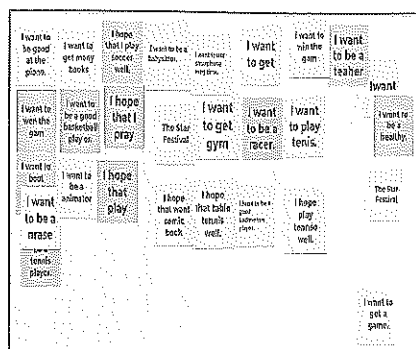
単元ごとの振り返りカードを活用し、新出文法ごとに振り返りの時間を設けている。振り返りには、自己の成長や次時への見通し、学んだことを実生活にどのように生かせるかの記載を続けてきた。単元ごとの振り返りカードを使用することで、単元を通して身に付けてほしい力や単元の評価法の共有を図った。このような丁寧な振り返りを続けることで、深い振り返りができるようになり、見通しをもって授業に取り組めるようになった。

オ A L T の活用

授業をA L Tと共に進めている。新出文法の導入時では、A L Tが新出文法を使用して生徒の興味が湧くような実際の使用場面を見せている。言語活動

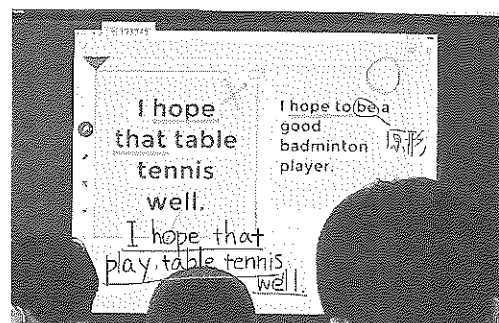
(二) 協働的な学び

ア デジタルホワイトボードの活用



(資料2) 先に貼られたものを参考にして自分の文章を書いたデジタルホワイトボード

料2のように、テーマに対して英文を書くことが得意な生徒が先に付箋を貼ることで、英文を書くことが苦手な生徒は先に



(資料3) みんなでなぜ違うのか間違いを確認する様子。

貼られているものを参考にしながら、自分のことを表現することができる。また、間違いを見つけて正しい文章に変えることや、多い間違いを学級全体で共有することができ。資料3のように、学級全体で共有したものを自分の学習用タブレット端末に蓄積している生徒も見られた。実際の間違いを学級全体で共有することで、間違えやすい箇所を意識して英文を書くことにつながった。また、自分の書いた文章だけでなく、他者の書いた文章に触れることでより多くの表現に触れる機会となり、表現の幅が広がった。

イ small talk の工夫

毎時間、帯活動としてsmall talkを実施している。具体的には、身近なテーマを提示し、生徒が自由に

自分の考えや気持ちを即興で伝え合う活動を二回行う。一回目は助言をせずに行う。その後を使用した表現や伝えられなかった表現を学級全体で共有し、適切な表現を全体で確認する中間指導を行う。その後にもう一度ペアを変えて行う。全体で確認をすることで、自分では思いつかない表現に触れることができる。このような共有をした後には、より主体的に伝え合おうとする様子が見られる。一回目と比べて二回目には、自分の表現の幅が広がっていることに気付かせる声を欠かさず行なった。

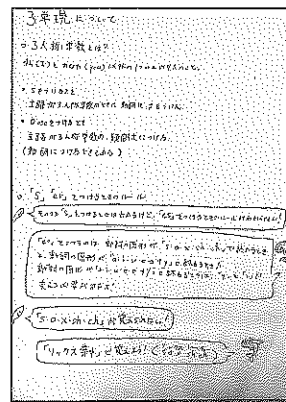
ウ student teacherの活用

教科書本文理解の授業をstudent teacher（以下stとする）が行った。stは、授業前に教科書を理解し、皆の前で堂々と授業を展開した。実際に問題を解く時間には、stが工夫を凝らしている場面が見られた。机間指導をし、手が止まってしまっている生徒に教える学級もあれば、「分からない人は解説をするので一緒に解いていきましょう」と声をかけ、全体に解説をする学級も見られた。stに挑戦した生徒の感想からは、いつもの何倍も理解してから授業に臨んだ様子や、教えたことで自分自身の理

解が深まった様子がうかがえた。また、授業を受けた生徒の感想からは、普段の授業よりも集中して取り組んだ様子や質問がしやすかったことがうかがえた。また、「stに挑戦してみたい」という生徒の声が多かったことから、主体的に英語学習に取り組む動機付けにつながったと考えられる。

エ ジグソー学習を活用した文法指導

年度末に、一年間学習してきた英文法ごとにチーム分けをし、エキスパート活動を行った。具体的には、担当の文法の用法を詳しく調べ、一枚の紙にまとめた。そして、チームを解体し、ジグソー活動として、自分



（資料4）3人称単数現在形についてまとめた紙

四 成果と今後の課題

ICTを活用した個別最適な学びと協働的な学びを通して、英語力に差のある子どもたちが主体的・対話的で深い学びを実現する英語教育を追求した結果、次のことが明らかとなった。

個別最適な学びを通して、三（一）アイウエから苦手な生徒の学習意欲向上につながったと考えられる。令和三年度学力診断のためのテストでは、正答率が10%未満の生徒が0人となった。協働的な学びを通して、三（二）アイから、級友の考え方を手掛かりに、自分だけでは気付けないことに気付くことができたと考えられる。ウエから英語が得意な生徒のアウトプットが増え、深く学習内容を理解することにつながった。令和三年度学力診断のためのテストでは、英文を書く問題の正答率が32%であり、県平均の正答率を2%上回ることができた。

以上のことから、ICTを活用した個別最適な学びと協働的な学びは、子どもたちの主体的・対話的で深い学びの実現に効果があったと考えられる。

今後は、さらに深い学びへとつなげていくために、目的・場面・状況の工夫をして、個人の特性に合った言語活動を実施する個別最適な学びを実現したい。また、zoomなど

を使用し、海外に住む外国人と実際のコミュニケーションを図る協働的な学びを行いたい。このような活動を通して、全員が主体的に自分の思いや考えを他者に伝えようとする態度を身に付け、グローバル社会で活躍できる「人財」の育成に努めていく。

【参考文献】

- ・「中学校学習指導要領」（文部科学省 平成29年3月）
- ・「学習指導要領の趣旨の実現に向けた 個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実に関する参考資料」（文部科学省初等中等教育局教育課程課 令和3年3月）
- ・「『令和の日本型教育』の構築を目指して―全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現―（答申）」（中央教育審議会 令和3年1月）
- ・「学校教育指導方針」（茨城県教育委員会 令和3年3月）
- ・「主体的・対話的で深い学びの実現（『アクティブ・ラーニング』の視点からの授業改善）について（イメージ）」（文部科学省 平成29年10月）